

2017/2/20

## (日々雑感 26) 再修正版



生き延びるためには、多くを学ばざるを得ない。学ばないと生き残れない。  
身を守るためには、警察とか警備会社に頼っている間は、間に合わない場合もある。  
誰かのせいにしていない暇はない。してもクソの役にも立たない。自衛こそ危機管理の最大の肝。

そんなことを実感しています。

危機管理、いわゆるリスク管理の肝は、いざという咄嗟の時に、次にどう動くかを日頃から事前につかんで、いざというその時に、直ぐに行動に移せることです。

今回、このようなことになって、そのいざという時が頻繁に訪れるような事態になると、危機管理がしっかりしているだろうと日頃無意識に思っていた組織や団体が、意外にダメであったり、自分自身にも甘いところがあったのを痛感させられました。

まず、自分のことから言うと、危機の定義が、震災や戦争など、大きなイベントだと思い込んでいたことと、それは滅多に起こらないことだろうともおもいこんでいたことです。簡単に言うと「対岸の火事」です。

ところが今回このような目に遭ってみると、そういった危機は、決して対岸の火事などではなく、滅多に起こらないものでもなく、平時に於いて、さほど大きな出来事としてではなく、極めて身近に起こり、且つ対応を誤ると、それがその後の重大な危機を招きかねないということでした。

ぼくは、今回の一件では、その初動に於いて対応を誤った可能性がありました。ぼくだけではなく、公的機関すらも。

その公的機関、あるいはそれに準ずるリスク管理のプロの機関乃至は組織についてですが、自分がこれだけ危機を事前に予測して、いろいろあれこれ足を棒にして動いているにもかかわらず、殆ど何も動作しないのです。動いてくれないのです。

縷々その事例をあれこれ言っても皆さんには鬱陶しいだけだと思いますので、三つに絞って言うと、感覚的な言い方ですが

声が届かない。

実感してもらえない。

応用がまるで出来ない。

の三つです。

そのほかに、警察は事件が起きない限り動けない。基本的に民事不介入で、刑事事件にならないとだめらしいのです。「起きそうだから助けて」はダメらしいのです。

ストーカー被害で、事前連絡をしながら毒牙にかかってしまうのは、このたぐいの矛盾からです。

昔、学生の頃良く聞いた言葉で「凶器準備集合罪」というのがありますが、あれは凶器を振るって何かをしたわけではないが、それとおぼしきものをもって集まっただけで逮捕出来たように記憶していますが、ストーカー被害者とかぼくとかの場合はそれに類するものはないみたいなのです。変な話だと思のですが。

一方、警備会社は、警備の中に文言としては「危機管理」という言葉が入ってはいるようなのですが、「で、どれが危機なの？で、何をすれば良いんだっけ？」状態です。日常の思考野にその文言が入ってすらいないので、探しても見つからないのです。実感するか否か以前の問題です。ですから、ぼくのような体験者から語りかけて、気づいてもらうようなことまでする羽目になっているのです。幾多の事例を出して。

そもそも、警備会社の警備員は、警報が鳴って現場に到着するのに、早くて5分、平均では10分くらいかかるらしいのですが、プロの空き巣、泥棒が犯行に要する時間はなんと3分。結局、気分的な安心感、つまりおまじないみたいなものらしいのです。

ですから、早い話が、元々両者とも最初からあまり当てになる存在ではないのです。まずこのことはしっかりとアタマに入れて置いた方が良いでしょう。

しかも両者とも応用が利かない。臨機応変の「応」がないので、臨機「変」なことになってしまうのです。

応用動作をするには、事例の積み重ね以前に、まず、基礎、基本を体得しておかないと、事例外のことが起きた場合に、動きようがありません。

「聞いたことあれへんから、なんもでけへんわ」

で終わってしまう可能性が高いのです。

ぼくの経験では、時間的ロスが一番怖い、つまり初動の躓きが一番怖いので、まず、出来ることと出来ないことをはっきり分ける。出来ないことは速やかに諦めて、思考野から追い払う。そのうえで、出来ることを洗い出して、順番をつけ、優先順位の高いものから、最善策を検討し、順次実行するとなります。

しかし、まず切り分けることが出来ないので、初っぱなから混乱が始まっているようです。

ですから、僕らの基本はまずは、自立自衛をアタマに入れておく必要がかなり高いのだと思っと思っています。最後に泣きを見ないためには。

あまり心配をかきたてるようなことばかり言っていると、嫌われそうなので、今日経験したちょっとホッとのお話をいたします。

勧めに従って家を出た直後、お金に関わる様々な機関を訪れ第三者に操作されないように手を打ちました。

その中で、更新時期を迎える IC タイプキャッシュカードの自宅への郵送を事前に止めようとしたものの、切り替え時期の数ヶ月前にもかかわらず、既に自動発送システムに乗ってしまっているので止めようがないと言われたので、それを手に入れた悪意を持った第三者が勝手に ATM から引き出せないように、キャッシュカードを無効にし、通帳のみ引き出し可能にしました。そのせいで、手持ち生活資金が底をつきそうになった本日、通帳をもって窓口へ引き出しに行ったところ、対応に出た女性行員から、やんわりとはあったものの、何故 ATM でカード引き出しをしないのか？さんざん聞かれたのですが、個人情報だから、で押し切りました。

それで相手も幾分不審がりながらも、それ以上は訊けなくなったのですが、手続きを進めていくうちに、IC タイプのカードの場合、通帳引き出しであっても、そのカードが生きていないと引き出せないことが分かり、その旨告げられました。

以前、キャッシュカードを止めるに当たって、カードは無効にするけれども、自動引き去りと自動入金、それに引き出しと預け入れはしたいと言ったところ、通帳での運用を勧められたのですが、その同行他店舗の窓口担当が勧めた方法の大前提が崩れてしまったのです。

「その説明は、はじめて聞きました。と言うことはおろせない？では、ぼくはどうすればいいんですか？」

しかし、窓口の一担当がシステムを変えることなど出来ようはずもないことは直ぐにわかりはしたんですが、だからといってこちらも引き下がるわけには行きません。

それで、しばらくすったもんだをしたのですが、これはもう版やむを得ない、と、思い切ってキャッシュカードを無効にした本当の経緯を彼女に話しました。

そこからです。

彼女は、平たい言い方をすると、それを聞いても「逃げなかった」のです。

物騒な経緯を聞いた後も聞く前と変わらず終始笑顔で、動作は沈着冷静でした。以前、同行他店舗の年配の女性行員が、同じく経緯を説明せざるを得なくなって、話を聞いた後、やたら上司にお伺いを立てに行ったり来たりしたのとは違い、こちらの「大変困っている状況」を充分理解した上で、更に、たらい回ししてぼくが困らないように、極力自分のところで、受け答えしようとしている様子が伺えました。上司のところへは、どうしてもやむを得ない場合を除いて、最低限度しか行きませんでした。

いわゆるワンストップ窓口の見本みたいなものでした。

その結果、支店長特裁で「本日に限り通帳でのお引きだしが可能に」なったのです。

「ですが、今回限りの特例なので、再度別の手続きをするためにご来店頂かなくてはなり

ませんの。その際は私をご指名くだされば、スムーズに参りますわ」

というので、

「支店の休み以外に休みの日があれば教えてください。来店していないとこまりますから」

というと

「まだ小さな子供がおりますので、熱とか急に出したりすることがなければご心配はいりませんわ」

と言いました。

「いえいえ、そこまでは求めませんから」

と言って、先ほどの「思いも寄らぬ沈着冷静に少しうれしくなりました」と、心ばかりのお礼を述べて帰りました。

きれいな人でした。

ぼくはきれいな人は誠意のない人が多いと勝手に思い込んでいたので、きれいな人があまり好きではなかったのですが、この若いお母さん行員さんは違いました。

いざというとき「逃げない」のは、ここ一ヶ月の限られた経験からは、やはり若い女の人の比率の方がかなり高いなと改めて思った次第です。

おそらく彼女は、日頃からそのような事態を時折想定しながら、日々の業務を行っていて、それを今日は無理なくスムーズに日常から移行して「ぼくが困っている状況」に当てはめたのだと思います。

やはり、日頃、何を意識野、あるいは思考野に置いて行動するか？それが大切なのではないのでしょうか。